

[原著論文]

ライフステージの異なる成人間における食育の認識の違いに関する分析

中村 洋

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Analysis of Differences in Recognition of Shokuiku (Nutrition Education) among Adults at Different Life Stages

Hiroshi NAKAMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要約 (Abstract)

The 4th Shokuiku Promotion Basic Plan, which was formulated to solve nutrition-related issues and instill healthy eating habits in people, calls for promoting shokuiku according to life stages and lifestyles. The study investigated the differences in the awareness of shokuiku among parents of children in kindergartens and nursery schools, university students, and workers in Sanyo-Onoda City. The analysis used data obtained from a survey conducted in the city in 2021 by the Sanyo-Onoda City Health Promotion Division (forms distributed: 1,711, forms collected: 1,508, response rate: 88.2%). The analysis shows that parents and people in district organizations involved in promoting shokuiku have a high level of interest in nutrition, but university students and workers have a low level of interest. A Meal Balance Guide was used by people with a high level of interest in nutrition, but was less likely to be used by people with low interest. As for how to disseminate information about nutrition, although a high percentage said they got it from the Internet, those with a high level of interest tend to get their information from newspapers, magazines, and friends. University students tend not to have opportunities to eat together, but students who are highly interested in nutrition are also more interested in places where they can eat together. By creating links such as these, it may become easier for students to contribute to local nutrition-related issues.

Key words: Sanyo-Onoda City, Nutrition Education, Basic Act on Shokuiku (Nutrition Education), Plan for the Promotion of Shokuiku

キーワード: 山陽小野田市, 食育, 食育基本法, 食育推進計画

1 はじめに

食べることは生活に欠かせない営みであり、健康的な成長と発達に不可欠であるとともに、慢性疾患の予防や管理を通じ、生活の質を高める上で重要な役割を果たしている¹⁾。

しかし核家族化、コンビニやファーストフード店の増加といった食生活を取り巻く社会環境やライフスタイルの変化に伴い、朝食の欠食や野菜摂取量の不足、栄養の偏り、不規則な食事、肥満や過度な痩身志向、孤食など様々な食に関する問題が深刻化している^{2),3)}。

このような課題を解決し、健全な食生活を実践できるようにするために、2005年に食育基本法が制定された⁴⁾。同法に基づき、2021年に策定された第4次食育推進基本計画では、ライフステージ、ライフスタイルに応じた食育の推進を行うこととなっている⁵⁾。

これまでライフステージ、ライフスタイルにおける食育に関する知見が蓄積されてきた。家族と一緒に食事をする「共食」の頻度が高い人は気が散る、根気がないという自覚が少なく^{6),7)}、朝食の欠食が少ない傾向にある⁸⁾。主食・主菜・副菜の揃った食事が少ないほど、朝食摂取頻度や昼食摂取頻度が少なく、夕食の時間が遅くなることも分かっている⁹⁾。地場産物を活用した食育を幼児と保護者に行くと、両者の夕食の共食頻度が増加しやすい¹⁰⁾。若い世代ほど栄養バランスに問題があり、特に大学生の食生活が乱れている¹¹⁾。大学生において食生活の乱れと調理技術には関連があるが、義務教育時に学んだ調理技術が定着していない¹²⁾。スマートフォンを多く使用する大学生ほど、朝食を欠食する傾向がある¹³⁾。勤労世代は野菜摂取の関心が低く¹⁴⁾、自分の野菜摂取量を把握できていない¹⁵⁾。十分に野菜を摂取できていないにも関わらず、自分は十分に摂取できていると認識し、野菜を摂取する手間を負担に感じている¹⁶⁾。中高年では不規則な朝食摂取や朝食の欠食が糖尿病のリスクを高めることや朝食を毎日食べることは脳卒中の予防に有用であることが分かっている⁸⁾。

健康的な食生活を実践するためには、個人が健康的な食生活を送るために適切な食品を選択し、自らの食行動を批判的に評価し、適用する能力である「食生活リテラシー」を高めることが重要である¹⁷⁾。情報を提供する側も情報の内容や提供方法に工夫が求められる。食生活リテラシーと情報源に関する先行研究から、インターネットは子育て世代を含む若い世代では情報源として挙げられるものの¹⁸⁾、食生活リテラシーが低くなるほど、インターネットから情報を得ても、難しく理解できない傾向がある。若い世代においても利用回数が多く、信頼する情報源とし

て友人・知人、医療従事者・専門家が挙げられている¹⁹⁾。

これらの先行研究から、ライフステージ、ライフスタイルの異なる対象、例えば幼稚園・保育園の園児のいる保護者、大学生、勤労者などにより、食育に関する認識や行動の違いがあることが明らかになっており、食情報の提供方法のあり方についての示唆も得られている。ただし成人を対象とした調査は、そもそも十分ではなく⁸⁾、勤労者についても疾病のある人を対象とした研究が中心であり、一般の勤労者を対象とする研究は不足している²⁰⁾。さらにライフステージの異なる対象を比較した研究も十分ではない。本論文では山陽小野田市内において、ライフステージごとの成人の食育に関する認識の違いを明らかにし、食育を推進するための示唆、特に地域の食育の推進における大学の役割を考察する。

2 調査方法・調査結果

質問紙を用いた調査と担当部署へのヒアリング調査を実施した。質問紙を用いた調査は、山陽小野田市健康増進課により2021年度に市内の20歳以上の成人を対象に、第2次山陽小野田市食育推進計画^{*1}の評価のために行われた。本分析に用いた調査項目は表1のとおりである。調査方法は、健康増進課が地区組織(山陽小野田市内の小学校校区ごとの食生活改善推進協議会^{*2}10組織と山陽小野田市連合女性会^{*3}、山陽小野田市母子保健推進協議会^{*4}の計12組織)、市内の企業(小売店や化学系企業など計9社)、山陽小野田市立山口東京理科大学、市内の幼稚園・保育園8園に質問紙を渡し、それぞれの組織や企業、大学、園が、それぞれ所属する人、従業員、20歳以上の大学生、園児の保護者に質問紙を配布し、回収した。質問紙の配布数1,711枚、回収数1,508枚であった(回収率88.2%。なお本市内の傾向を明らかにすることから、市外在住者の回答は分析から除外した。配布数、回収数、回収率は市内在住者のものである)。調査は2021年11月15日から12月15日にかけて行われた。

この調査により収集され、本分析に用いられたデータは、山陽小野田市役所と山口東京理科大学との覚書に基づき、山陽小野田市健康増進課から個人を特定できる情報が含まれないデータとして提供を受けた。

本研究では、食育に関する認識を比較するライフステージとして、幼稚園・保育園に通園する園児の保護者(以下「保護者」)、市内の企業の従業員(以下「勤労者」)、山陽小野田市立山口東京理科大学の20歳以上の大学生(以下「大学生」)、及び「地区組織」を用いる。4群のサンプル数は保護者n=423、勤労者n=465、大学生n=219、地区組織

n=400の計n=1507であった(大学生については薬学部と工学部の学生が含まれる)。4群の属性を表2に整理する。年齢については大学生が20歳代、保護者が30歳代、勤労者が40歳代、地区組織が60歳以上であった。性別については、保護者は女性が多く、勤労者は男性が多く、大学生と地区組織は男女が半数程度であった。家族構成については、大学生は単身者が、それ以外は核家族が多かった。保護者のほぼすべてに18歳以下の子どもがおり、地区組織の回答者の82%には高齢者がいた。

表2 属性に関する調査結果

質問項目	分類	N	平均	標準偏差
0-1 年齢	保護者	423	2.14	0.65
	勤労者	465	3.02	1.40
	大学生	219	1.02	0.15
	地区組織	400	5.53	0.77
	合計	1507	3.15	1.83
0-2 性別	保護者	423	0.07	0.25
	勤労者	466	0.73	0.45
	大学生	219	0.49	0.50
	地区組織	399	0.42	0.50
	合計	1507	0.43	0.50
0-3 家族構成	保護者	420	1.87	0.34
	勤労者	443	2.07	0.51
	大学生	216	2.77	0.52
	地区組織	367	1.93	0.43
	合計	1446	2.08	0.54
0-4 18歳以下の子どもの有無	保護者	420	0.97	0.18
	勤労者	450	0.34	0.47
	大学生	219	0.02	0.15
	地区組織	375	0.13	0.34
	合計	1464	0.42	0.49
0-5 65歳以上の高齢者の有無	保護者	386	0.13	0.42
	勤労者	444	0.30	0.46
	大学生	219	0.06	0.25
	地区組織	385	0.82	0.38
	合計	1434	0.36	0.50

筆者が健康増進課の食育の担当者にヒアリング調査を行った結果のうち、紙面の制約から考察と関連する内容について以下に整理する。

若い世代ほど高血圧といった健康面の問題が顕在化しておらず、男性は料理、食事の準備、片付けなどをする割合が女性より少なく、食への関心が低い。幼稚園や保育園

の保護者については、小学生ぐらいまでは子どもの健康のために食への関心が高い。勤労者については、コロナ禍前までは食に関する出前講座の依頼があったものの、コロナ禍になってから依頼が減少している。食に関するマナーについては、幼稚園・保育園の保護者は箸の持ち方といった基礎的なものを想定しているが、大学生になると作法など、異なるものを想定していると思われる。食生活改善推進協議会では食に関する研修会を定期的に開催しており、平均すると月に1回程度は何らかの食に関して学ぶ場が設けられている。幼稚園・保育園や小学校・中学校では食育に関する年間計画が作成されており、それに基づいて調理体験などの活動が行われている。大学生は知識として食育を学び、自ら判断し、食に関する問題を解決できるような能力を育成することが必要であるが、食育に関する学習の機会は十分ではない。食事バランスガイドについては、広報が十分に行われており認知度は高い。しかし同ガイドを利用するためには使い方を学ぶ必要があるものの、そのような場は不足している。地域の共食の場については、行政も取り組んでいるが、地域の組織が主体となって活動が広まることも重要である。例えば、YAPフレンズ[※]が山陽小野田市内で行っている「やっぶ食堂」は、子どもから高齢者まで幅広く参加でき、子どもは無料で大人も300円で参加できる活動を行っている。調理体験だけではなく、一緒に食事をする中で食に関する学びもあり、地域の交流の場となっている。食に関する情報源として若い世代はインターネットだとする回答割合が多いものの、関心がなければインターネット上にある食育に関する情報にたどり着かないし、情報を得ても自ら判断するためには食に関する知識が必要になる。関心のない人が正しい食生活を実践するためには、対面での学びも有効かもしれない。

3 分析方法

Shapiro-Wilk(シャピロ-ウィルク)検定を行った結果、分析対象の変数については、等分散性を仮定できないことが分かった。そのため保護者、勤労者、大学生、地区組織の4群間の違いについては、Kruskal-Wallis(クラスカル・ウォリス)検定により分析し、そこで有意差が見られた場合には多重比較を行った。食育への関心と相関のある要因を明らかにするために、保護者、勤労者、大学生、地区組織について、食育への関心(表3の1-1)と、その他の変数(表3の2以降)について相関分析を行った。等分散性を仮定できないことからSpearman(スピアマン)の順位相関係数を求めた。分析にはIBM SPSS Statistics(ver.24)を用いた。

4 分析結果・考察

検定結果を表3に、相関分析の結果を表4に示す。以下に有意な違いや相関が見られたものを中心に結果を整理し、考察を行う。

食育という言葉については、4群いずれも90%以上が知っている(表3の1-2)。しかし食育への関心(同1-1)については、保護者と地区組織が高く、勤労者と大学生が低い。勤労者については男性割合が高いことから、食事は女性の役割と認識しており、食育への関心が低く、大学生については若さから高血圧などの健康上の問題が起これにくいから、食育への関心が低いものと考えられる。

食育のうち関心のある分野(表3の2-1~2-8)については、全体としては食の安心・安全(同2-1)、食生活・食習慣の改善(同2-2)への関心が高い。保護者は食の安心・安全(同2-1)、農林水産加工業体験(同2-3)、食事の食べ方やマナー(同2-6)への関心が高い。未就学児がいることから、安全な食事を与えたいという思いも強く、子ども達に体験の機会を設けたい、そして箸の使い方、食器の持ち方といったマナーを覚えさせたいという思いが強いためと考えられる。勤労者は多くの分野で関心が低いが、食生活・食習慣の改善(表3の2-2)と食を通じたコミュニケーション(同2-7)については他群よりも特に関心が低い。若いことから食生活を見直そうと思うような健康面の課題が少なく、仕事の忙しさから食を通じたコミュニケーションへの関心が低いものと考えられる。大学生については食文化の伝承(表3の2-4)と食事の食べ方やマナー(同2-6)への関心が高い。大学において様々な地域出身の学生との交流をすることで、それぞれの地域における伝統的な食事や食べ方の作法といった面で関心が高くなったものと考えられる。地区組織については食の安心・安全(表3の2-1)と環境に配慮した食品リサイクル等(同2-5)への関心が高い。年齢が高いことから健康への意識が高く、もったいないという思いも強い世代であるためと考えられる。地区組織は食事の食べ方やマナー(同2-6)を伝える機会が少なかった。コロナ禍で親族や地域の人たちが集まって食事をする共食の場が失われたことで、子ども達にマナーを伝える機会が失われたためと考えられる。相関分析(表4)から保護者、勤労者ともに食への関心の高い人たちは、幅広い分野に関心を有している。逆に言えば食への関心の低い人たちは、どの分野についても関心を有していない。

食事バランスガイド(表3の3-1)については勤労者の62%、地区組織の76%、大学生の77%、保護者の88%が知っている。しかし食事の際に参考にしてしている割合は、大学生15%、勤労者20%、保護者28%、地区組織51%と低下

する。相関分析の結果から、食への関心が高いほど、食事バランスガイドを活用している傾向が見られた。食事バランスガイドは2005年に厚生労働省と農林水産省が共同で作成したもので、健康的な食事の推進や肥満予防に役立つ²¹⁾。母子手帳に掲載され、ポスターも様々な場所に掲示され、広く認知されている。食事バランスガイドについては、食への理解が深ければ活用でき、食生活の改善につながるものの、やや複雑であるため、食についての知識がない場合には知っていても活用できず、食生活の改善につながりにくいことが先行研究から明らかになっている²¹⁾。本研究でも関心の高い人たちが活用しているが、関心の低い人たちは知っているけれども食事バランスガイドを活用していない傾向が見られた。そのため山陽小野田市では、バランスのよい食事となるための主食・主菜・副菜の構成や内容、机の上での配置といったマナーを含めて、直感的に理解しやすい「食育ランチョンマット」を活用している(図1)。

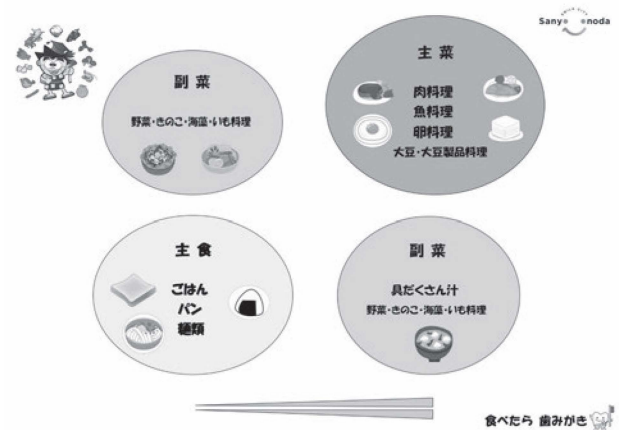


図1 食育ランチョンマット 図の出所は22)

食に関する情報源(表3の4-1~4-9)については、大学生は新聞雑誌の割合が特に低く、インターネットの割合が高い。地区組織は活動しているグループから情報を得ている。地区組織以外はスーパーが情報源となっている割合が高い。勤労者は家族・友人からの情報が少ない。地区組織の食生活改善推進協議会では月1回程度は何らかの活動を行っており、研修会も開かれることから、そのような場を通じて食に関する情報を得られている。スーパーでは、それぞれ食育に関する取組が行われている。例えば、ゆめタウン・ゆめマートを経営する株式会社イズミでは、食品ロスの削減に消費者が取り組み、子ども食堂を消費者が支援する「もぐもぐチャレンジ」を行っている²³⁾。このような取組が目につき、スーパーから情報を得ているとする割合が高くなったものと考えられる。ただし、相関分析からは食への関心とスーパーでの情報の入手には関係が見られない

ことから、スーパーは関心の低い群が食に関する情報を得る場となっていると考えられる。保護者、大学生、勤労者は、地区組織よりもインターネットから食に関する情報を得ている割合が高い。相関分析の結果(表4)から、それらの3群は食に関する関心が高いほど、インターネットよりも家族や友人から情報を得ており、保護者と勤労者は新聞雑誌から情報を得ている傾向が見られた。関心の高い人たちは分かりやすく情報を伝えてくれることから、家族や友人、新聞や雑誌を主要な情報源にしているものと考えられる。

共食の場への参加経験(表3の5-1)については、地区組織の参加割合が高い。ただし大学生は共食の場(同5-2)を得られていない。地区組織の人たちは自治会など地域のイベントで共食の場を過去に得られていたものの、大学生はコロナ禍で共食の場を得られていないためであろう。ただし、相関分析の結果(表4)からは、食への関心の高い大学生ほど、参加の場があると認識していることから、少ないものの関心を持って探せば場は得られている。孤食となっている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場に一緒に行ける人がいれば参加したいかという問(表3の6-1)については、地区組織の人たちは参加したい人の割合が高く、勤労者ではその割合は低い。勤労者は仕事で時間が取れず、参加が難しいためと考えられる。大学生については49%が参加したいと回答しており、一緒に行ける人がいれば参加したい(表3の6-2)とする割合の高さは食への意識の高い保護者や地区組織とも差がない。相関分析の結果(表4)からは、大学生の食への関心と地域の共食の場に参加したいとする回答の相関係数は他群よりも高いことから、食への関心の高い大学生は共食の場への参加意欲も高いと考えられる。

5 おわりに

本研究により、食への関心、食事バランスガイド、情報源、共食・孤食への取組について、山陽小野田市内におけるライフステージの異なる成人の特徴を明らかにすることができた。

政策的示唆を考察する。食に関する関心は勤労者や大学生は低く、関心が低い人ほど情報源はインターネットであった。しかし膨大な情報が溢れるインターネット上から適切に情報を選択し、評価し、取捨するためには「食生活リテラシー」が必要である。食事バランスガイドに代表されるツールも食に関する知識があつてこそ活用される。そのため食への関心の低い人たちが食育について学ぶ環境を積極的に整えることが必要ではないだろうか。勤労者や大学生については、企業や大学が専門家から食生活リテラ

シーを高めるための講習を受ける機会を設け、半ば強制的に参加させることが必要と考えられる。

食への関心の高い大学生は共食の場への参加意欲も高い。地域で行われている共食の場に関心のある大学生が友人と一緒に参加できるような仕組みを整備することで、食に関する地域課題の解決に大学が貢献できる可能性がある。

最後に課題を述べる。本研究はライフステージごとの比較が中心であったことから、食育に関する認識の傾向をもたした背景や要因については十分に実証できたとは言えない。今後は食に関する認識の高さや変化をもたらす経路(パス)を明らかにするような研究が必要と考えられる。

注釈

- 1 食育基本法において都道府県および市区町村に対して地域特性に合わせた食育推進計画の策定・実施が求められている⁴⁾。第2次山陽小野田市食育推進計画は、地域や家庭とも連携して様々な食育を推進するために策定されたものである。
- 2 食生活改善推進員とは山陽小野田市が開催する食生活の改善に関する講座を受講し、地域においてボランティアとして食育活動を行っている人である²⁴⁾。
- 3 山陽小野田市連合女性会とは、子育てが終わった人たちが、地域において青少年健全育成や子育てサポートを行っている²⁵⁾。
- 4 山陽小野田市母子保健推進協議会とは、地域に密着した活動を通じて、母子の健康づくりを推進する組織²⁶⁾であり、山陽小野田市では、子育ての輪をつくるための季節行事の開催や子ども向けの体験活動、地域の交流イベントを実施している²⁷⁾。
- 5 YAP(やっぷ)フレンズとは、地域に笑顔と元気を届けることを目指し、子どもから大人まで楽しいと感じるイベントを開催している山陽小野田市内にある民間の団体である²⁸⁾。

謝辞

データの提供からヒアリングまで多くのご協力を頂いた山陽小野田市健康増進課様に深くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) World Health Organization : Global Strategy on Diet, Physical Activity and Health
(https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/43035/9241592222_eng.pdf) (2023年11月7日アクセス)。
- 2) 厚生労働省: 令和元年 国民健康・栄養調査の結果

- の概要
(<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000687163.pdf>) (2023年11月7日アクセス).
- 3) 小田麗子・永井由美子: 高校生の食育への関心度から見た食知識・配慮・調理技術・食の主観的評価の実態, 栄養学雑誌, 79(5), 9頁, 2021年, 302-310.
 - 4) 農林水産省: 食育基本法
(<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-20.pdf>) (2023年11月7日アクセス).
 - 5) 農林水産省: 第4次食育推進基本計画
(<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-24.pdf>) (2023年11月7日アクセス).
 - 6) 會退友美, 衛藤久美: 共食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連—国内文献データベースとハンドサーチを用いた文献レビュー—, 日本健康教育学会誌, 23, 11頁, 2015年, 279-289.
 - 7) 衛藤久美, 會退友美: 家族との共食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連—海外文献データベースを用いた文献レビュー—, 日本健康教育学会誌, 23, 16頁, 2015年, 71-86.
 - 8) 中出麻紀子・木林悦子・諸岡歩: 朝食時における家族との共食状況と成人の朝食欠食との関連, 日本健康教育学会誌, 28(3), 9頁, 2020年, 198-206.
 - 9) 中出麻紀子・木林悦子・諸岡歩: 20, 30歳代成人における主食・主菜・副菜の揃った食事と関連する食習慣, 日本栄養・食糧学会誌, 74(5), 7頁, 2021年, 265-271.
 - 10) 小谷清子・古谷佳世・猿渡綾子・和田小依里・東あかね: 幼稚園と保育所の幼児と保護者を対象とした地場産物(アカモク)を活用した食育の実践とその評価, 栄養学雑誌, 78(1), 8頁, 2020年, 5-12.
 - 11) 厚生労働省: 平成27年国民健康・栄養調査報告
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyoudl/h27-houkoku.pdf> (2023年11月7日アクセス).
 - 12) 本田藍・中村修・片渕結子: 義務教育における学習と大学生の食生活、生活習慣病予防態度との関連、日本食育学会誌, 4, 11頁, 2010年, 91-101.
 - 13) 井上久美子・小林三智子・長澤伸江: 女子大学生における使用場面数を指標としたスマートフォンの使用状況と健康状態や生活行動に対する自己管理能力との関連, 日本健康教育学会誌, 27, 9頁, 2019年, 164-172.
 - 14) 串田修・村山伸子: 男性勤労者を対象とした野菜摂取行動に関するトランスセオレティカルモデルの変容プロセス尺度の検討, 日本公衆衛生雑誌, 59, 10頁, 2012年, 861-870.
 - 15) 厚生労働省: 平成29年国民健康・栄養調査報告,
<https://www.mhlw.go.jp/content/001066645.pdf> (2023年11月7日アクセス).
 - 16) 農林水産省: 野菜の消費をめぐる状況について,
https://www.maff.go.jp/j/study/yasai_kentou/04/pdf/dat a1-1.pdf (2023年11月7日アクセス).
 - 17) 清水信輔・臺有桂: 青年期・成人前期における「食生活リテラシー」の概念分析, 日本健康教育学会誌, 29(1), 12頁, 2021年, 16-27.
 - 18) 多田美由貴・岡久玲子・岩本里織・松下恭子: 乳幼児をもつ母親の育児に関するヘルスリテラシーの明確化, 日本地域看護学会誌, 24(3), 10頁, 2021年, 13-22.
 - 19) 高泉佳苗・原田和弘・柴田愛・中村好男: 健康的な食生活リテラシー尺度の信頼性および妥当性—インターネット調査による検討, 日本健康教育学会誌, 20(1), 11頁, 2012年, 30-40.
 - 20) 信田幸大・前田泰宏・曾根智子・衛藤久美: 勤労者を対象とした栄養教育プログラムが野菜摂取行動に及ぼす効果, 栄養学雑誌, 78(5), 13頁, 2020年, 210-222.
 - 21) 伊東奈那・赤松利恵: 食生活の指針利用者の属性と食習慣との関連, 栄養学雑誌, 73(4), 9頁, 2015年, 150-158.
 - 22) 山陽小野田市: 食育ランチョンマット
<https://www.city.sanyo-onoda.lg.jp/uploaded/attachment/35579.pdf> (2023年11月7日アクセス).
 - 23) イズミ: ゆめタウン・ゆめマート全99店舗で『もぐもぐチャレンジ』開始
https://www.izumi.co.jp/corp/outline/news_release/pdf/2023/0125news.pdf (2023年11月8日アクセス).
 - 24) 山陽小野田市: 第2次山陽小野田市食育推進計画, 山陽小野田市, 2019年.
 - 25) やまぐち子育て連盟: 山陽小野田市連合女性会,
<https://yamaguchi-kosodate.net/yubitoma/kaiin/?id=51> (2023年11月7日アクセス).
 - 26) やまぐち県民活動支援センター: 山口市母子保健推進協議会,
<https://www.kenmin.pref.yamaguchi.lg.jp/dantai/dantai30230/> (2023年11月7日アクセス).
 - 27) 山陽小野田市: 山陽小野田市母子保健推進協議会,
<https://www.city.sanyo-onoda.lg.jp/uploaded/attachment/56677.pdf> (2023年11月7日アクセス).
 - 28) 山陽小野田市: Y A P フ レ ン ズ
<https://www.city.sanyo-onoda.lg.jp/soshiki/12/yapfriends.html> (2023年11月8日アクセス).

表1 質問項目と分析データ

属性に関する質問（すべて単一回答）

No.	質問項目	分析データ
0-1	年齢	1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代 6. 70以上
0-2	性別	1 男性 0 女性
0-3	家族構成	1 大家族（3世代以上） 2 核家族（夫婦のみ又は親と子どもの世帯） 3 単身者
0-4	18歳以下の子供	1 いる 0 いない
0-5	65歳以上の高齢者	1 いる 0 いない

食育に関する質問

No.	質問項目	分析データ
1-1	食育に関心があるか（単一回答）	1 ある 0 ない
1-2	食育という言葉聞いたことがあるか（単一回答）	1 ある 0 ない
2	「食」のどの分野に関心があるか（あてはまるものをすべて選択。複数回答）	
2-1	食の安心・安全	1 ある 0 ない
2-2	食生活・食習慣の改善	1 ある 0 ない
2-3	農林水産加工業体験（収穫・工場見学など）	1 ある 0 ない
2-4	食文化の伝承	1 ある 0 ない
2-5	環境に配慮した食品リサイクル等	1 ある 0 ない
2-6	食事の食べ方やマナー	1 ある 0 ない
2-7	食を通じたコミュニケーション	1 ある 0 ない
2-8	その他	1 ある 0 ない
2-9	関心がない	1 ある 0 ない
3-1	食事バランスガイドを知っているか（単一回答）	1 知っている 0 知らない
3-2	食事バランスガイドを食事の参考に使っているか（単一回答）	1 している 0 していない
4	「食」に関する情報をどこから得ているか（あてはまるものをすべて選択。複数回答）	
4-1	テレビ・ラジオ	1 得ている 0 得ていない
4-2	新聞や雑誌等	1 得ている 0 得ていない
4-3	スーパーや小売店	1 得ている 0 得ていない
4-4	家族や友達	1 得ている 0 得ていない
4-5	インターネット	1 得ている 0 得ていない
4-6	活動しているグループ	1 得ている 0 得ていない
4-7	行政の広報誌	1 得ている 0 得ていない
4-8	専門誌	1 得ている 0 得ていない
4-9	その他	1 得ている 0 得ていない
4-10	特になし	1 特になし 0 その他
5-1	地域にいる様々な人が集える共食の場（自治会や子ども会などの会食の場）に参加したことがあるか	1 参加したことがある 0 参加したことがない
5-2	地域にいる様々な人が集える共食の場（自治会や子ども会などの会食の場）について、参加する場があるか	1 参加する場がある 0 参加する場がない
6-1	孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場があれば参加したいか	1 参加したい 0 参加したくない
6-2	孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場に、一緒にいる人がいれば参加したいか	1 一緒に行く人がいれば参加したい 0 参加したくない

表3 検定結果

** p<0.01、*p<0.05

質問	分類	n	平均	標準偏差	有意確率
1-1 食育に関心があるか	保護者	420	0.70	0.46	**
	勤労者	434	0.32	0.47	
	大学生	207	0.37	0.49	
	地区組織	356	0.63	0.48	
	全体	1417	0.52	0.50	
1-2 食育という言葉聞いたことがあるか	保護者	423	0.99	0.08	**
	勤労者	463	0.94	0.24	
	大学生	218	0.95	0.22	
	地区組織	391	0.91	0.29	
	全体	1495	0.95	0.22	
2「食」のどの分野に関心があるか					
2-1 食の安心・安全	保護者	416	0.76	0.43	**
	勤労者	460	0.65	0.48	
	大学生	219	0.53	0.50	
	地区組織	396	0.85	0.36	
	全体	1491	0.72	0.45	
2-2 食生活・食習慣の改善	保護者	416	0.66	0.47	**
	勤労者	460	0.55	0.50	
	大学生	219	0.67	0.47	
	地区組織	396	0.62	0.49	
	全体	1491	0.62	0.49	
2-3 農林水産加工業体験	保護者	416	0.19	0.39	**
	勤労者	460	0.05	0.23	
	大学生	219	0.09	0.28	
	地区組織	396	0.09	0.29	
	全体	1491	0.11	0.31	
2-4 食文化の伝承	保護者	416	0.18	0.39	*
	勤労者	460	0.13	0.34	
	大学生	219	0.22	0.42	
	地区組織	396	0.16	0.37	
	全体	1491	0.16	0.37	
2-5 環境に配慮した食品リサイクル等	保護者	416	0.09	0.29	**
	勤労者	460	0.08	0.27	
	大学生	219	0.08	0.28	
	地区組織	396	0.18	0.38	
	全体	1491	0.11	0.31	

質問	分類	n	平均	標準偏差	有意確率
2-6 食事の食べ方やマナー	保護者	416	0.60	0.49	**
	勤労者	460	0.25	0.44	
	大学生	219	0.39	0.49	
	地区組織	396	0.18	0.38	
	全体	1491	0.35	0.48	
2-7 食を通じたコミュニケーション	保護者	416	0.28	0.45	**
	勤労者	460	0.09	0.29	
	大学生	219	0.18	0.39	
	地区組織	396	0.14	0.35	
	全体	1491	0.17	0.38	
2-8 その他	保護者	416	0.00	0.07	
	勤労者	460	0.02	0.12	
	大学生	219	0.02	0.13	
	地区組織	396	0.00	0.05	
	全体	1491	0.01	0.10	
2-9 関心がない	保護者	416	0.03	0.16	**
	勤労者	460	0.11	0.31	
	大学生	219	0.07	0.26	
	地区組織	396	0.04	0.19	
	全体	1491	0.06	0.24	
3-1 食事バランスガイドを知っているか	保護者	422	0.88	0.32	**
	勤労者	463	0.62	0.49	
	大学生	219	0.77	0.42	
	地区組織	392	0.76	0.43	
	全体	1496	0.75	0.43	
3-2 食事バランスガイドを食事の参考にしていくか	保護者	373	0.28	0.45	**
	勤労者	288	0.20	0.40	
	大学生	168	0.15	0.36	
	地区組織	298	0.51	0.50	
	全体	1127	0.30	0.46	
4「食」に関する情報をどこから得ているか					
4-1 テレビ・ラジオ	保護者	417	0.71	0.45	**
	勤労者	463	0.71	0.46	
	大学生	219	0.45	0.50	
	地区組織	393	0.70	0.46	
	全体	1492	0.67	0.47	

質問	分類	n	平均	標準偏差	有意確率
4-2 新聞や雑誌等	保護者	417	0.17	0.37	**
	勤労者	463	0.20	0.40	
	大学生	219	0.05	0.21	
	地区組織	393	0.45	0.50	
	全体	1492	0.24	0.43	
4-3 スーパーや小売店	保護者	417	0.44	0.50	**
	勤労者	463	0.35	0.48	
	大学生	219	0.38	0.49	
	地区組織	393	0.24	0.43	
	全体	1492	0.35	0.48	
4-4 家族や友達	保護者	417	0.41	0.49	**
	勤労者	463	0.22	0.42	
	大学生	219	0.32	0.47	
	地区組織	393	0.35	0.48	
	全体	1492	0.32	0.47	
4-5 インターネット	保護者	417	0.66	0.47	**
	勤労者	463	0.44	0.50	
	大学生	219	0.71	0.46	
	地区組織	393	0.15	0.35	
	全体	1492	0.46	0.50	
4-6 活動しているグループ	保護者	417	0.03	0.17	**
	勤労者	463	0.01	0.09	
	大学生	219	0.02	0.15	
	地区組織	393	0.21	0.41	
	全体	1492	0.07	0.26	
4-7 行政の広報誌	保護者	417	0.07	0.26	**
	勤労者	463	0.06	0.24	
	大学生	219	0.01	0.12	
	地区組織	393	0.22	0.41	
	全体	1492	0.10	0.30	
4-8 専門誌	保護者	417	0.03	0.17	**
	勤労者	463	0.01	0.09	
	大学生	219	0.01	0.10	
	地区組織	393	0.04	0.20	
	全体	1492	0.02	0.15	
4-9 その他	保護者	417	0.02	0.15	
	勤労者	463	0.01	0.09	
	大学生	219	0.01	0.12	
	地区組織	393	0.01	0.09	
	全体	1492	0.01	0.12	
4-10 特になし	保護者	417	0.03	0.18	**
	勤労者	463	0.09	0.29	
	大学生	219	0.08	0.27	
	地区組織	393	0.03	0.17	
	全体	1492	0.06	0.23	
5 地域にいる様々な人が集える共食の場に					
5-1 参加したことがある	保護者	195	0.59	0.49	**
	勤労者	226	0.58	0.49	
	大学生	75	0.68	0.47	
	地区組織	262	0.76	0.43	
	全体	758	0.65	0.48	
5-2 参加する場がある	保護者	421	0.46	0.50	**
	勤労者	464	0.49	0.50	
	大学生	218	0.34	0.48	
	地区組織	390	0.67	0.47	
	全体	1493	0.51	0.50	
6 孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場に					
6-1 参加したいか	保護者	418	0.58	0.50	**
	勤労者	460	0.39	0.49	
	大学生	218	0.49	0.50	
	地区組織	384	0.66	0.47	
	全体	1480	0.53	0.50	
6-2 一緒にいる人がいれば参加したいか	保護者	418	0.49	0.50	**
	勤労者	460	0.35	0.48	
	大学生	218	0.42	0.50	
	地区組織	384	0.46	0.50	
	全体	1480	0.43	0.50	

表4 食育への関心(質問No.1-1)とその他の変数との相関分析結果

** p<0.01, *p<0.05

質問		保護者	勤労者	大学生	地区組織
2「食」のどの分野に関心があるか					
2-1 食の安心・安全	相関係数	0.23**	0.19**	0.24**	0.18**
	n	413	429	207	354
2-2 食生活・食習慣の改善	相関係数	0.29**	0.21**	0.24**	0.27**
	n	413	429	207	354
2-3 農林水産加工業体験(収穫・工場見学など)	相関係数	0.17**	0.13**	0.06	0.13*
	n	413	429	207	354
2-4 食文化の伝承	相関係数	0.20**	0.23**	0.25**	0.22**
	n	413	429	207	354
2-5 環境に配慮した食品リサイクル等	相関係数	0.20**	0.23**	0.11	0.10
	n	413	429	207	354
2-6 食事の食べ方やマナー	相関係数	0.16**	0.12**	0.10	0.04
	n	413	429	207	354
2-7 食を通じたコミュニケーション	相関係数	0.26**	0.15**	0.15*	0.07
	n	413	429	207	354
2-8 その他	相関係数	0.03	0.15**	-0.11	-0.07
	n	413	429	207	354
2-9 関心がない	相関係数	-0.23**	-0.21**	-0.18*	-0.22**
	n	413	429	207	354
3-1 食事バランスガイドを知っているか	相関係数	0.07	0.18**	0.12	0.40**
	n	419	431	207	349
3-2 食事バランスガイドを食事の参考に使っているか	相関係数	0.24**	0.17**	0.24**	0.21**
	n	373	278	158	281
4「食」に関する情報をどこから得ているか					
4-1 テレビ・ラジオ	相関係数	0.02	-0.02	-0.02	0.04
	n	414	431	207	353
4-2 新聞や雑誌等	相関係数	0.22**	0.22**	0.06	0.08
	n	414	431	207	353
4-3 スーパーや小売店	相関係数	0.03	0.08	0.08	0.04
	n	414	431	207	353
4-4 家族や友達	相関係数	0.17**	0.10**	0.19**	0.07
	n	414	431	207	353
4-5 インターネット	相関係数	0.16**	0.16**	0.15*	-0.02
	n	414	431	207	353
4-6 活動しているグループ	相関係数	0.08	0.14**	0.01	0.29**
	n	414	431	207	353
4-7 行政の広報誌	相関係数	0.14**	0.14**	-0.09	0.13*
	n	414	431	207	353
4-8 専門誌	相関係数	0.09	0.06	0.03	0.03
	n	414	431	207	353
4-9 その他	相関係数	0.07	-0.01	-0.01	0.01
	n	414	431	207	353
4-10 特になし	相関係数	-0.18**	-0.16**	-0.16*	-0.13*
	n	414	431	207	353

質問		保護者	勤労者	大学生	地区組織
5-1 地域にいる様々な人が集える共食の場に参加したことがあるか	相関係数	0.21**	0.04	0.10	0.31**
	n	195	216	72	239
5-2 地域にいる様々な人が集える共食の場について、参加する場があるか	相関係数	0.09	0.05	0.23**	0.14**
	n	418	432	206	348
6-1 孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場があれば参加したいか	相関係数	0.16**	0.16**	0.36**	0.26**
	n	415	429	206	343
6-2 孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場に、一緒にいる人がいれば参加したいか	相関係数	0.07	0.11**	0.30**	0.10
	n	415	429	206	343